平成３０年６月１８日
独立行政法人大学入試センター

「大学入学共通テスト」における問題作成の方向性等と本年１１月に実施する試行調査（プレテスト）の趣旨について

○　大学入試センター（以下「センター」という。）では、昨年７月に文部科学省が公表した「大学入学共通テスト実施方針」（以下「実施方針」という。）に基づき、「大学入学共通テスト」（以下「共通テスト」という。）の問題作成や実施に向けた検証を行っています。昨年１１月には、全国の高校・中等教育学校にご協力をいただいて試行調査[1]（プレテスト[2]。以下「試行調査」という。）を実施し、問題作成の方針等を決定していくために必要となるデータの分析･検証を行い公表[3]したところです。

○　本年１１月には、全国の大学を会場として２回目の試行調査[4]を実施する予定です。それに先立ち、２０２０年度からの共通テストの実施に向けて現在検討されている問題作成の方向性等を、試行調査の趣旨と併せて各高校等（高等学校、中等教育学校、高等部を設置する特別支援学校）及び各大学の関係者にお知らせするため、本ペーパーをとりまとめました。

○　各高校等におかれては､生徒や保護者等との情報共有にも適宜ご活用ください｡また、各国公私立大学におかれては、学内における所要の準備・検討に適宜ご活用ください。
　その際には、このとりまとめに記載された情報は現時点での検討状況を踏まえたものであること、各教科・科目における問題のねらいや実施方法等（「大学入試センター試験出題教科・科目の出題方法等」に相当するもの）については、これから１１月に実施される試行調査の分析･検証を経て、来年度初頭に正式に公表される予定であり、最終的には来年度以降の情報を確認する必要があることにご留意ください。

---

[1] 平成２９年１１月１３日～２４日に実施。全国１，８８９校の高校･中等教育学校にご協力いただいた。なお、英語及び受検上の配慮（点字）については平成３０年２月に実施。

[2] 「大学入学共通テスト実施方針」においては「プレテスト」と表記されているが、よりその趣旨が明確になるよう「試行調査（プレテスト)」の名称に改めたところ。

[3] 平成３０年３月２６日付で「大学入学共通テストの導入に向けた試行調査（プレテスト）（平成２９年１１月実施分）の結果報告」を公表（センターのＨＰで閲覧可能)。

[4] 平成３０年１１月に実施する試行調査の日程等については、別紙のとおり。

１．問題作成の方向性

（１）大学入試センター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしつつ、共通テストで問いたい力を明確にした問題作成

○　大学入試センター試験の問題については、試験問題評価委員会を設置し、毎年度、高校教員からの外部評価を受けるとともに、関係する教育研究団体等からも意見をいただき、改善を重ねてきています。全体としてはおおむね、高校等における日常の教育活動を踏まえつつ、大学教育の基礎力を適切に問う問題として評価をいただいているところです。

○　一方で、さらなる良問作成に向けた工夫・改善についてもご意見をいただいています。具体的には、例えば、国語における言語活動を意識した問題や、数学的な見方・考え方を働かせることが求められるような問題、理科において実験や観察に基づく探究活動を通じ科学的な思考力等を問うような問題、歴史的思考力を引き出すために多様な資料を活用した問題の充実などに向けたご指摘をいただいているところです。

○　こうしたご指摘は、大学教育の基礎力となる知識及び技能や思考力、判断力、表現力がどの程度身に付いたかを問おうとする共通テストのねらいにも通じるものです。共通テストでは、これまで問題の評価・改善を重ねてきた大学入試センター試験における良問の蓄積を受け継ぎつつ、高校教育を通じて大学教育の入口段階までにどのような力を身に付けていることを求めるのかをより明確にしながら問題を作成し、実施していくこととしています。

（２）高校教育の成果として身に付けた、大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力を問う問題作成

○　現在、高校教育及び大学教育において「何をどのように学び、何ができるようになるのか」を明確にしながらその充実を図るため、高校等においては、指導のねらいとする資質・能力の育成を目指した「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が、大学では、三つの方針[5]の策定・公表とこれらの方針に基づく大学教育の質的転換が、関係者の努力と連携により着実に進められているところです。

○　高校等と大学それぞれの段階における教育の特質を生かしつつ、高校生の学びの成果を効果的に大学に接続していくためには、高校教育と大学教育の接続段階で実施される大学入学者選抜において、どのような学習成果を問うのかが重要になります。共通テストでは、高校教育を通じて、大学教育の基礎力となる知識及び技能や思考力、判断力、表現力がどの程度身に付いたかを問うことをねらいとしています。

---

[5] ①入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）、②教育課程の編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）、③卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

○　このため共通テストでは、高等学校学習指導要領において育成を目指す資質・能力に準拠し、知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視します。また、作問のねらいとして問いたい力が、高校教育の指導のねらいとする力や大学教育の入口段階で共通に求められる力を踏まえたものとなるよう、各教科・科目[6]において問いたい思考力、判断力、表現力を明確に整理[7]した上で問題を作成することとしています。

（３）「どのように学ぶか」を踏まえた問題の場面設定

○　共通テストでは、高校等における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のメッセージ性も考慮し、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等をもとに考察する場面など、学習の過程を意識した問題の場面設定を重視することとしています。

○　問題の中では、教科書等で扱われていない初見の資料等が扱われることもありますが、問われているのはあくまで、高校等における通常の授業を通じて身に付けた知識の理解や思考力等です。初見の資料等は、新たな場面でもそれらの力が発揮できるかどうかを問うための題材として用いるものであり、そうした資料等の内容自体が知識として問われるわけではないことに留意してください。

２．実施教科･科目等

（１）共通テストにおける実施教科･科目（２０２０年度から実施）

○　２０２０年度から実施される共通テストにおける実施教科・科目は、別添１のとおり予定されています。

○　２０２０年度から共通テストに移行しますが、現行の高等学校学習指導要領に基づく学習範囲の中から問題が作成されるという点については、２０１９年度までと変更はないことから、過年度卒業者用の別の問題は作成しない方向で検討しています。

（２）試行調査の趣旨と実施教科･科目（本年１１月実施）

○　昨年１１月に実施した試行調査では、「１」に示した問題作成の方向性を最大限重視した問題を出題した場合の正答率や解答の傾向等を分析することとし、目標平均正答率は設定しなかったところです。この試行調査の結果分析を踏まえ、共通テストにおいて問

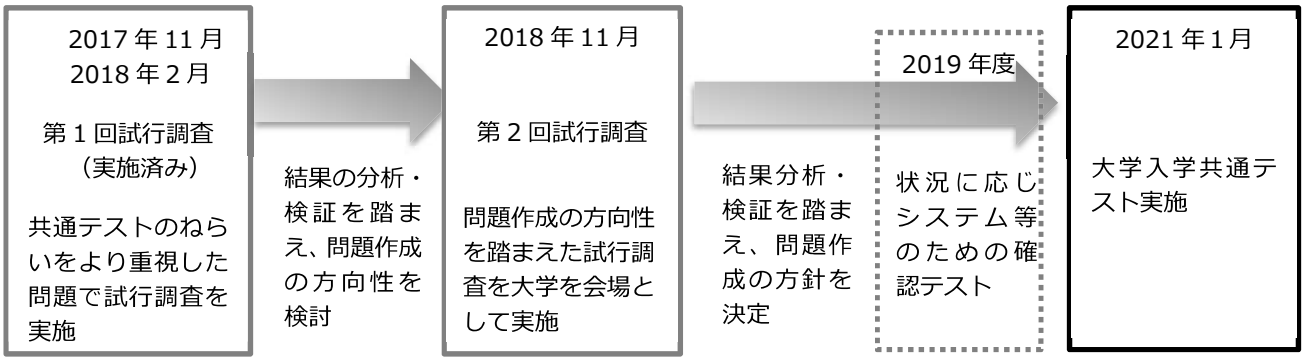
---

[6] 別添１参照。

[7] 現在、別添２のとおり各教科・科目について、作問のねらいとする主な「思考力、判断力、表現力」等として、整理中。なお、倫理、政治・経済については、試行調査の問題公表とあわせて公表予定。

いたい知識や思考力等を重視した作問の在り方と、選抜試験としてふさわしい難易度や識別力の設定とを両立させる観点から、共通テストの問題作成の方向性を検討しています。

○　本年１１月に行う試行調査は、この方向性に基づき作成した問題について全国的な回答データを収集し、共通テストの問題作成方針の決定に必要な分析・検証を行うものです。なお、平均得点率（平均正答率）については、５割程度として実施し検証する予定です。



○　試行調査においては、（１）の表に示した実施科目のうち、「数学Ⅰ」、「数学Ⅱ」、「地理Ａ」、「世界史Ａ」、「日本史Ａ」、「倫理、政治・経済」、「簿記・会計」、「情報関係基礎」、「ドイツ語」、「フランス語」、「中国語」、「韓国語」については、実施しません。

○　「地理Ａ」、「世界史Ａ」、「日本史Ａ」については、本年度中に問題例を公表する予定です。また、「ドイツ語」、「フランス語」、「中国語」、「韓国語」については、「英語」に関する問題作成の方向性を踏まえつつ、「英語」と異なり資格・検定試験を活用する枠組みがないことなどを勘案し、問題作成のねらいや実施方法等を来年度初頭に公表する予定です。「簿記・会計」、「情報関係基礎」についても、問題作成のねらいや実施方法等を来年度初頭に公表する予定です。

（３）共通テストの枠組みにおける英語の資格･検定試験の活用との関係

○　外国語科の科目のうち「英語」については、２０２０年度から２０２３年度まで[8]の枠組みとして、各大学は、センターが問題を作成し共通テストとして実施する試験と、民間の試験実施主体が実施する資格・検定試験とのいずれか又は双方を利用できることとされています。

○　センターでは、各大学による資格・検定試験の活用を支援するため「大学入試英語成績提供システム」[9]を設け、一定の参加要件を満たすことが確認[10]された、本システムに

---

[8] ２０２４年度以降の枠組みについては、資格・検定試験の実施・活用状況等を検証しつつ決定される予定。

[9] 別添３参照。

[10] 別添４参照。

参加する資格・検定試験について、受検生から申出のあった回の成績を一元的に集約し、要請のあった大学等に対して提供する予定です。

○　「大学入試英語成績提供システム」の詳細については別途お知らせしますが、原則として在学者の場合、高校３年生の４月から１２月までの間に受検した２回までの資格・検定試験の結果が大学に提供されることになります。資格・検定試験の受検の際に、センターからあらかじめ個人ごとに発行された ID を記載する[11]ことにより、試験実施主体からセンターに受検生の成績が自動的に送付され、大学に提供されます。提供される成績は、各試験のスコア（バンド表示も含む。）とヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）の段階別表示（合否がある場合はその合否も）が基本となります。

○　なお、センターが問題を作成する「英語」の試験については、「英語」以外の科目と同様に、高校教育を通じて大学教育の基礎として共通に求められる力を身に付けているかどうかを把握することが目的となります。具体的には「７」に示すとおり、義務教育段階の学習からの連続性を受けつつ「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」「英語表現Ⅰ」の科目の範囲からの出題となり、CEFR との対応では A1～B1 相当となる予定です。

一方で資格・検定試験は、試験の目的に応じて幅広い英語力を把握することが可能です。大学の判断により多様な結果が活用される可能性があることから、「大学入試英語成績提供システム」を通じて成績提供する範囲も A1～C2 の幅広い範囲[12]が想定されているところです。

３．記述式問題の導入

○　国語と数学Ⅰにおいて、それぞれ小問３問の記述式問題が導入されます。解答用紙には新たに記述式問題の解答欄[13]が設けられます。問題の内容等についての方向性は、「７」に示すとおりです。

○　記述式問題の正答の条件や段階別評価の基準については、共通テスト実施後速やかに公表されます[14]。なお、記述式問題の採点は、民間事業者に採点作業を委託しながら、センターで行います。

---

[11] ＩＤ発行手続等については別途通知予定。

[12] 別添５参照。

[13] 試行調査における解答用紙のイメージは別添６参照。また、国語の試行調査の記述式問題における記述に当たっての留意点（イメージ）は別添７参照。

[14] 試行調査の実施の際には、自己採点の参考になる情報を動画等で提供させていただく予定です。

【国語】

○　国語では、２０～３０字程度、４０～５０字程度、８０～１２０字程度を記述する問題がそれぞれ１問ずつ出題される予定です。記述式問題の導入に伴い解答時間が延長され、「国語」が１００分（現行の大学入試センター試験では８０分）になります。

○　国語の記述式問題については、マーク式問題の配点とは別に、記述式問題の段階別評価が示されます。段階の数については、小問ごとに４段階表示、総合評価については８０～１２０字程度を記述する小問についてのみ１．５倍の重み付けを行った上で５段階表示とすることが検討されています[15]。

【数学】

○　数学Ⅰでは、数式を記述する問題、または問題解決のための方略等を端的な短い文で記述する問題が３問、マーク式問題と混在する形で出題される予定です。記述式問題の導入に伴い解答時間が延長され、「数学Ⅰ」、「数学Ⅰ・数学A」が７０分（現行の大学入試センター試験では６０分）になります。

○　数学Ⅰの記述式問題については、段階別評価は行われず、マーク式問題と同様に配点が行われます。

４．マーク式問題における新たな解答形式

○　当てはまる選択肢を全て選択する問題や、解答が前問の解答と連動し正答の組み合わせが複数ある問題など[16]の新たな解答形式が検討されています。試行調査における分析・検証を経て、来年度初頭に実施の有無を公表する予定です。

５．受検上の配慮

○　受検上の配慮については、障害等がある受検生に対する合理的な配慮を行うため、現行の大学入試センター試験で行ってきた受検上の配慮事項[17]を踏まえ、共通テストにおける受検上の配慮事項等について検討を行っています。特に、記述式問題の解答で文字を書くことが困難な受検生に対しては、審査の上、パソコンを利用した解答を認めることについて具体的な実施方法等の検討を行っています。

---

[15] 別添８のイメージ参照。

[16] 問題のイメージは別添９のとおり。

[17] 現行の配慮については別添１０のとおり。

６．成績提供の時期等

○　記述式問題の導入に伴い、センターから大学への成績提供時期は現行の大学入試センター試験よりも１週間程度後ろ倒しされる見込みです。成績については素点及び国語の記述式問題の段階別評価のほか、各科目について９段階程度の段階別評価を参考情報として提供することを検討しています。

○　これに伴い、国語については、古文、漢文の大問も含めた全体の素点の提供を原則とする予定です。ただし、参考として大問ごとの素点についても提供することを検討しています。

７．各教科・科目における問題作成の方向性と、試行調査における問題作成方針

○　各教科・科目について、昨年１１月に実施された試行調査の結果を踏まえて検討されている問題作成の方向性と、それを踏まえた本年１１月の試行調査の問題作成方針は次のとおりです。なお、平均得点率（平均正答率）については前述のとおり、５割程度として試行調査を実施し検証する予定です。

（１）国語

○　近代以降の文章（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章）、古典（古文、漢文）といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視します。言語を手掛かりとしながら、与えられた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりすることなどが求められます。大問ごとに固定化した分野から一つの題材で問題を作成するのではなく、分野を越えて題材を組み合わせたり、同一分野において複数の題材を組み合わせたりする問題も含まれます。

○　記述式の問題は、実用的な文章を主たる題材とするもの、論理的な文章を主たる題材とするもの又は両方を組み合わせたものとし、小問３問で構成される大問１問を出題します。テキストの内容や構造を把握し、解釈することや、その上で要旨を端的にまとめ、わかりやすく記述することを求めることとし、小問３問の解答字数については、２０～３０字程度、４０～５０字程度、８０～１２０字程度をそれぞれ１問ずつ出題します。

（２）数学（数学Ⅰ・数学Ａ、数学Ⅱ・数学Ｂ）

○　数学的な問題解決の過程を重視します。事象の数量等に着目して数学的な問題を見いだすこと、構想・見通しを立てること、目的に応じて数・式、図、表、グラフなどを活用し、一定の手順に従って数学的に処理すること、解決過程を振り返り、得られた結果を意味づけたり、活用したりすることなどが求められます。また、日常の事象や、数学の

よさを実感できる題材、教科書等では扱われておらず受検生が既知ではないものも含めた数学の定理等を既知の知識等を活用しながら導くことのできるような題材等も取り扱うこととしています。

○　記述式の問題は、数学Ⅰにおいて設定することとし、マーク式問題と混在させた形で小問３問を出題します。数式を記述する問題、または問題解決のための方略等を端的な短い文で記述する問題を出題します。

（３）地理歴史

（地理（地理 B））

○　地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視します。事象の空間的な規則性を分析して地域性を捉えることや、地域の変容や構造について考え、地域の課題を理解し将来像について構想していくことが求められます。系統地理と地誌の両分野からのアプローチを意識した問題も含まれます。

（歴史（世界史 B、日本史 B））

○　歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視します。用語に関する知識ではなく、事象の意味や意義、特色や相互の関連等に関する理解が求められます。教科書等で扱われていない初見の資料についても、そこから得られた情報と授業で学んだ知識を活用しながら、仮説を立てたり、歴史的事象の展開を考察したりすることができるかどうかを問う問題や、時代や地域によらず「歴史の見方」のようなテーマを設定した問題、時間軸を長く取った時代を貫く問題なども含まれます。

（４）公民

（現代社会）

○　現代社会の課題や人間としての在り方生き方等について多面的・多角的に考察する過程を重視します。文章や資料をしっかりと読み解きながら、重要な概念や理論等を活用して考察することが求められます。身近な社会的事象に重要な概念や理論等を適用して考察する問題や、各種の統計など多様な資料を読み解き、さまざまな立場から考察する問題などが含まれます。

（倫理）

○　人間としての在り方生き方にかかわる倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視します。文章や資料をしっかりと読み解きながら、先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察することが求められます。人間としての在り方生き方にかかわる倫理的諸課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて思考したり、批判的に吟味

したりする問題や、原典資料や芸術作品など多様な資料を手掛かりとして、さまざまな立場から考察する問題などが含まれます。

（政治・経済）

○　現代における政治、経済、国際関係等について多面的・多角的に考察する過程を重視します。現代における政治、経済、国際関係などの客観的な理解を基礎として、文章や資料をしっかりと読み解きながら、政治や経済の基本的な概念や理論等を活用して考察することが求められます。社会的事象に政治や経済の基本的な概念や理論等を適用して考察する問題や、各種の統計など多様な資料を読み解き、さまざまな立場から考察する問題などが含まれます。

（５）外国語

（英語）

○　試行調査においては、英語の資格・検定試験活用に関する方針も踏まえながら、「読むこと」「聞くこと」の能力をバランスよく把握するため、筆記（リーディング。マーク式）とリスニング（マーク式）を課すこととします。

いずれにおいても、CEFR を参考に、A1 から B1 までの問題を組み合わせて出題します。また、実際のコミュニケーションを想定した明確な場面、目的、状況の設定を重視します。

○　筆記（リーディング）については、テキストを読み事実や意見等を整理する力、テキストの構成を理解する力、テキストの内容を理解して要約する力等を問うことをねらいとし、問題の構成や内容について検証を行います。なお、英語の資格・検定試験の活用を通じて「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の総合的な評価がなされる方針であることを踏まえ、試行調査においては、筆記（リーディング）の問題では「読むこと」の力を把握することを目的とし、発音、アクセント、語句整序などの問題は出題せず実施し検証することとします。

○　リスニングについては、複数の情報を比較して判断する力や、議論を聞いて要点を把握する力等を問うことをねらいとし、問題の構成や内容について検証を行います。音声については、アメリカ英語以外の読み上げ（イギリス英語や英語を母語としない話者による読み上げ）も行います。

また、資格・検定試験における英語のリスニング試験における一般的な在り方や平成２９年度の試行調査の結果を踏まえ、１回読みと２回読みが混在する構成で実施し、試行調査を通じて検証することとします。

○　英語教育改革の方向性の中で各技能の能力をバランスよく把握することが求められていることや、多くの英語の資格・検定試験で各技能の配点が均等となっている状況を踏まえ、試行調査においては、「筆記（リーディング）」「リスニング」の配点を均等として

実施する予定です。最終的な配点は、試行調査の実施状況や関係者のご意見等を踏まえながら決定されます。いずれにしても、各大学の入学者選抜において、４技能を総合的に評価するよう努めるという実施方針を踏まえつつ、具体的にどの技能にどの程度の比重を置くかは各大学の判断によるという点に変わりはありません。

（６）理科

（物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎）

○　日常生活や社会と関連した科学的な事物・現象に関する基本的な概念や原理・法則などの理解を伴う知識を問うたり、それらを活用したりして考察する問題や、科学的に探究する方法を用いる過程を重視します。自然の事物・現象に関する問題の中から本質的な情報を見いだし、課題の解決に向けて主体的に考察・推論することが求められます。仮説を検証する過程で数的処理を伴う思考力等が求められる問題なども含まれます。

（物理、化学、生物、地学）

○　科学的な探究の過程を重視します。自然の事物・現象の中から本質的な情報を見いだし、課題の解決に向けて主体的に考察・推論することが求められます。教科書等では扱われておらず受検生にとって既知ではないものも含め、資料等に示された事物・現象を分析的、総合的に考察することができるかという、科学の基本的な概念や原理・法則などの深い理解を伴う知識や思考力等を問う問題や、仮説を検証する過程で数的処理を伴う思考力等が求められる問題なども含まれます。

なお、大学教育の基礎力として共通に求められる力を測るという共通テストの趣旨を踏まえ、センター試験では理科の各科目の中で出題されてきた理科の選択問題については、高校教育における履修順序や範囲等に配慮しつつ、設定しないこととする予定です。

８．今後の予定

○　本年１１月に試行調査を実施して結果の分析・検証を行い、本年度中に結果を公表予定です。共通テストの実施に関する正式な決定事項については、来年度初頭に文部科学省が策定する「大学入学共通テスト実施大綱」を踏まえてセンターが策定する各教科・科目における問題のねらいや実施方法等に関する通知や、２０２０年度初頭の「大学入学共通テスト実施要項」を通じてお知らせする予定です。

○　共通テストの問題作成の体制については、本年度中に構築できるよう関係機関の協力を得て準備を進めています。新たに「問題作成方針分科会（仮称）」を科目ごとに設置し、共通テストの各教科・科目における問題のねらいや問いたい力を高校関係者も含めて検討できる体制を整備する予定です。また、センターに常勤の試験問題企画官（高校の指導主事経験者等）を科目ごとに配置し、教科教育と学問領域双方の知見を問題に反映で

きる体制を整備することとしています。具体的な問題作成を大学教員が担うという点については、これまでと変わりはありません。

○　２０２０年度以降の検定料については、２０１９年度中にお知らせする予定です。

○　２０２３年度までの実施状況の検証を踏まえつつ、２０２４年度からは、新学習指導要領に基づく新しい教科・科目によるテストが実施されることになります。詳細については２０２２年度初頭頃に文部科学省及びセンターから公表される予定です。

○　なお、共通テストに関する情報は、センターのホームページの右側の「大学入学共通テスト」というバナーをクリックし、詳細をご覧ください。

別添１

大学入学共通テストにおける出題教科・科目について（予定）

下線は、現行センター試験との相違点を示す。

教　　科	ｸﾞﾙｰﾌﾟ	出 題 科 目	科 目 選 択 の 方 法 等	試験時間
国　　語		『国　　語』		100分
地理歴史		「世界史Ａ」 「世界史Ｂ」 「日本史Ａ」 「日本史Ｂ」 「地理Ａ」 「地理Ｂ」	左記出題科目の10科目のうちから最大２科目を選択し，解答する。 ただし，同一名称を含む科目の組合せで2科目を選択することはできない。	１科目選択 60分 ２科目選択 130 分（うち解答時間120分）
公　　民		「現代社会」 「倫　理」 「政治・経済」 『倫理，政治・経済』		
数　　学	①	「数学Ⅰ」 『数学Ⅰ・数学Ａ』	左記出題科目の２科目のうちから１科目を選択し，解答する。	70分
	②	「数学Ⅱ」 『数学Ⅱ・数学Ｂ』 『簿記・会計』 『情報関係基礎』	左記出題科目の４科目のうちから１科目を選択し，解答する。	60分
理　　科	①	「物理基礎」 「化学基礎」 「生物基礎」 「地学基礎」	左記出題科目の８科目のうちから下記のいずれかの選択方法により科目を選択し，解答する。 Ａ　理科①から２科目 Ｂ　理科②から１科目 Ｃ　理科①から２科目及び理科②から１科目 Ｄ　理科②から２科目	【理 科 ①】 ２科目選択 60分 【理 科 ②】 １科目選択 60分 ２科目選択 130 分（うち解答時間120分）
	②	「物　　理」 「化　　学」 「生　　物」 「地　　学」		
外国語		『英　　語』 『ドイツ語』 『フランス語』 『中国語』 『韓国語』	左記出題科目の５科目のうちから１科目を選択し，解答する。	【筆記（リーディング）】 80分 【リスニング】（『英語』のみ）60分（うち解答時間30分）